

アルフレッド・シュッツの記号概念

—シュッツ社会学における他者理解論の射程—

Symbol Concept of Alfred Schutz

— range of theory about others understanding in Schutz sociology —

白石 哲郎

要 旨

本稿の目的は、現象学的社会学の嚮導として知られるA.シュッツが後期に示した記号概念（間接呈示的指示関係）について、彼自身が、それらをどのような関心や目的のもとで分類したのか概要を整理し、類型化論や社会的世界論とも密接に関連した他者理解論の文脈によりひきつけて、つまり、「あらゆる（他者）思考の間主観的な構造」に焦点をしばって捉え返すことで、その射程を探るものである。とくに「サイン」、「シンボル」といった間主観性を前提とする記号概念は、純粋な行為の経験的レベルでみれば、今ここに生きる日常生活者が、自分以外の共在者、同時代者、先行者が営む（営んでいた）行為や文化の意味を典型的に把握するための準拠図式として機能している。そしてこの事実、ほかならぬ記号そのものが、他者理解の不正確さや困難さといった制約をわれわれに課しているということでもある。このようなパラドクスに着目しながらシュッツ独自の記号概念を検討する試みは、国境を越えた人間の移動と社会的相互作用が所与となった今日だからこそ、異文化理解や異文化コミュニケーションの問題を考察するにあたって、われわれに有効な知見を提供してくれるはずである。

キーワード：間接呈示的指示関係、サイン、シンボル、間主観性、他者理解の不正確さ

1. シュッツの記号論的研究： 関心の所在

A.シュッツは、「目印 (mark)」、「指標 (indication)」、「サイン (sign)」、「シンボル (symbol)」という一連の記号概念について、「第一級のすぐれた人びとが努力してきたにもかかわらず、精確に定義しようとするどんな企てにも抵抗しているようにみえる」(Schutz 1973b=1985: 113)として、人間科学の歴史において提唱されてきた「記号」をめぐる用語法がいかに複雑で多義的なものであるかを強調する。

彼のこの指摘については、代表的なF. de ソシュールの「記号 (signe)」——「シニフィアン（記号表現）」と「シニフィエ（記号内容）」の不可分離の統一体であり、言語を中心に、恣意性（表現と内容二項間の非有縁性）の原理に即する軍隊用の合図、文化的な儀礼や礼儀作法などが含まれる——やC.S.パースの「記号 (sign)」——「解釈項」、「対象」との三項関係で捉えられ、とくに「対象」との関係性に応じて「アイコン（類似記号）」・「インデックス（指標記号）」・「シンボル（象徴記号）」に分類される——はむろんのこと、G.フレーゲの「シンボル (symbol)」, C.W.モリスの「記号媒体

(sign vehicle)」、C.K.オグデンとI.A.リチャーズの「シンボル (symbol)」、E.カッシーラーとS.K.ランガーの「シグナル (signal)」・「シンボル (symbol)」など、シュッツの表現に倣えば、「日常的思考活動に関する論理学」(Schutz 1976=1991: 137)の系譜に連なる「普遍的で、シンボル化に用いられうる、諸々の間接呈示的指示関係の諸群……を研究する……哲学的人間学」(Schutz 1973b=1985: 168)の代表的な概念を少し見渡しただけで首肯せざるをえない。

シュッツは広汎な記号概念、すなわち彼自身の用語法における「間接呈示的指示関係 (appresentational reference)」の通底性について言及する際、E.フッサールの「対化」ないし「組化」の概念に依拠している。それは、直接的には知覚不可能なある対象の裏面を、直接的に知覚可能な同一対象の前面から「類比的な仕方」で把握することによって、かかる二つの与件をひとつのゲシュタルトとして統覚する「受動的綜合」の一形式であり、このとき「根源呈示」している対象の項と、これによって「間接呈示」される対象の項とが対をなすという性質上、「連合」とも呼ばれる。ここからシュッツは、知覚主体に根源呈示されている要素が実在的、仮象的問わず、それによって「間接呈示される要素を『覚醒し』あるいは『呼び起こす』という」(Schutz 1973b=1985: 125)作用のなかに、記号一般の根本的特徴を見出している。

シュッツが間接呈示的指示関係の諸概念を通じて考察しようとしたのは、客体化された「記号の使用」を不可避的にともなう事物の意味理解の構造、とくに様々な「社会的世界」に暮らす人びとの行為や文化の意味理解の構造であり、このことは、ナチスの迫害を避けるべく祖国オーストリアを離れ、パリを経由してアメリカに亡命する艱難期に生じた思想の変化と無関係ではない。

事実、『社会的世界の意味構成』(1932)を著した当時のシュッツは、「現象学的原理のもと

づく社会学の課題」として①「社会的人格の理念型」の問題（とりわけ「我々関係」を中心とする諸種の社会関係の問題）、②「関連性(レリヴァンス)」および「社会科学のあらゆる範疇にとって本質的に重要」とされる「関心状況」の問題、③「あらゆる思考の間主観的な構造の解明および超越論的他我的超越論的自我からの構成」の問題をあげていたが、亡命直後の1940年の論稿では、上記の①と②に準じたⅠ「社会的人格についての学説」とⅡ「関心と関連性の問題」に加え、Ⅲ「社会的な共在者の世界、同時代者の世界、先行者の世界、後続者の世界」¹⁾を今後探求すべき課題として新たに掲げている (Schutz 1932, 1971; 西原1998)。

シュッツ独自の記号論的研究は、上記のⅢで示された「社会的世界の諸次元」における行為や文化の意味も射程に入れており、まさにそれは、「あらゆる思考の間主観的な構造の解明」と地続きの問題、つまり自己＝「私」が時間と空間を同じくする、あるいは異にする他者の「思惟 (cognition)」をいかなる機序のもとで理解しているのかについて、「現象学的還元」によってのみ真に明証的となる「超越論的主観性」の観点からではなく、渡米を契機にいつそう明示化された、「我々関係」——「生活世界の与件」である対面レベルでのコミュニケーションの間身体的関係——という社会学的概念を基底に追究する試みの延長線上に位置している（初期の探求課題③のうち、「超越論的他我的超越論的自我からの構成」が後景に退いていることから判明のように、シュッツからみて他我認識の問題をめぐるフッサールの思想は独我論の域に留まるものであった）。

シュッツにとって他者理解の機序を解明する仕事は、信念、認識、振る舞いの自明性からなる生活世界的前提や構造に焦点をあてる「自然的態度の構成的現象学（日常生活世界社会学）」の重要な柱にほかならず、彼の記号概念も、そのような前提や構造、具体的には「社

会的世界および社会的現象が行為者にもたらす意味」とともに、「相互理解という人間の行動を規定するメカニズム」への関心が立脚点をなしている。例えば、それぞれ異なる文化圏に属する行為者は、自分達の生活世界内にいるかぎり、妥当性なり有効性なりが問われないお互いの常識にもとづいて「異質な他者」の存在および行為を素朴に表象し、また解釈している。かかる事実を目を向けたとき、世界や物事について、個々の人間が当たり前の与件として受け入れている、いわば疑念の停止という「特有のエポケー」を通じて自明視している、その根本的なメカニズムに主眼を置く自然的態度の構成的現象学は、異文化理解の構造を解明するうえでひとつの鍵になるものといえよう。

あくまで経験科学としての社会学の地平から、科学以前の生活世界における主観的な諸経験をそれらに即して記述しようと努めるのがシュッツの立場であるが、M. ウェーバーの衣鉢を継ぐ彼の学問的探求は、つねに「行為者自身によって主観的に思念された行為の意味」を基点としている。しかしシュッツは当初、ウェーバーの意味概念の不十分さを指摘し、H. L. ベルクソンの思想にみられる「内的時間意識」に関係づける省察をもって、その欠欠をのりこえようとした (Schutz 1932)。

所謂「主観的解釈」(理解社会学の方法論的公準)の対象たる「思念された意味」、すなわち「意味連関の主観的な意味」(Weber 1922=1972:16)のなかでも中心に位置づけられているのは「行為の動機」であるが、シュッツは動機概念を、企図された行為によって将来的にもたらされるべき事態(行為を企図した時点であらかじめ想像されている未来=行為の到達点)としての「目的動機」(未来完了時制に属しており「～のために」と言表される行為の目的)と、すでに完遂した行為、あるいは進行中の行為における過去の一時点に立ち戻ることによって回想的に把握される「理由動機」(過去完了時制に

属しており「～だから」と言表される行為の理由)に区別する。シュッツからすれば、第一義的に「他の人の行為は、その目的動機と理由動機を知らない限り理解できない」(Schutz 1976=1991:31)ものであった。こうした理解社会学の克服をはかる試みのなかで、行為の動機はむろんのこと、思考、感情、知識、さらに世界観をも含め、他者の思惟についての認識論的関心が深まっていったのである。

実際に後期のシュッツが、間接呈示的指示関係という広義の記号に関わる問題として論及したのは、自己が様々なかたちで接する現実や文化、そしてそのもとで関わりあう他者といった「対象一般の意味理解の構造」であった(西原1998)。

次節では、自己の到達可能範囲内に存する対象、および到達可能範囲外に存する超越的对象の意味構造に照射したシュッツの記号概念について、概要を整理したい。

2. シュッツの記号概念

2.1. 「目印」と「指標」:

主観的な間接呈示的指示関係

本稿の冒頭でもあげたシュッツによる四つの記号概念は、「シンボル・現実・社会」論文(1962)において、「人間が、そのなかで生を営む世界にかんする知識や、彼の仲間にかんする知識および彼自身にかんする知識を得るために、……用い発達させるように導いた」諸手段、および「人間がそれによって超越の多様な経験に対処しようと努める諸手段」(Schutz 1973b=1985:121)といった位置づけを与られている。「超越の多様な経験」とは、存在者としての自己の「被投性」と不可分な生活世界 (Lebenswelt) を、様々なレベルで超えた出来事や物事のことである。

まず「目印」は、かつては自己にとって实际的に到達可能な範囲内²⁾にあったが、自己の身

体が別の場所や時点に移動したために、もはや到達可能な範囲内にはない超越的な諸対象を想起すべく用いられる記号である。人間は、「自分がかつて行ったところへ立ち戻るならば、私が想起した世界を私の实际的に到達可能な範囲内に戻すことができると知っているか、あるいはそう想定している」(Schutz 1973b=1985: 138-9)が、その際の想起を手助けする機能を「目印」は果たしている。したがって「目印」とは、道しるべ、本にはさむ葉、写真など、過去のある時点では到達可能な範囲内に属しており、实际的に操作できていた対象を「自己に主観的に思い出させる道具立て(記憶を助ける道具立て)」として役立つもののなのである。

次に「指標」には、パースの「インデックス」の一部やランガーの「自然的シグナル」に相当する「自然的記号」の多くが含まれる³⁾。例えば、月のまわりのカサは雨の到来を指示し、煙は火の発生を指示するが、それら「指標」から得た知識は、自己の到達可能な範囲を物理的に超越した自然現象に対処するための実践的な処方箋として機能する(雷鳴が轟けば、木の下などから離れたたり干していた洗濯物を室内に入れるなど)。

「目印」と「指標」が代理的に指示する内容＝「間接呈示的意味」の違いについて、前者の場合、過去に生起していた人間的事象が該当し、後者の場合、過去、現在、未来における自然的事象の生起ないしその過程が該当する。しかし、いずれの記号も、行為者個人の内部で完結した用いられ方をするとところに特徴が見出されるのであり、この性質において「目印」と「指標」は、主観的な間接呈示的指示関係——「必ずしも相互主観性を前提とはしていない間接呈示的なカテゴリー」(Schutz 1973b=1985: 143)——といえよう。

2. 2. 「サイン」：間主観的な間接呈示的指示関係

「サイン」とは、私以外の人間が日常的に思念している意味を間接呈示するものであり、その解釈対象は、自己が志向する「汝が汝自身について何を考え、何を思っているのか」という他者の意識生に向けられる。このときの他者存在の範疇には、身体的な到達可能性との関係で初期に論及されていた「社会的世界の諸次元」に属する行為者達が含まれる (Schutz 1932)。

具体的には、a: 相互的な「汝志向」⁴⁾ に依拠した「我々関係」(対面的関係)のもとで、自己とともに共通のコミュニケーション環境に参加している「共在者」(自己と時間と空間を共有している行為者)、b: 自己と時間のみを共有している行為者である「同時代者」、すなわち、今この瞬間においては、自己の眼前に根源呈示されていないが、昨日まで、あるいはつい先ほどまでお互いに志向し動機づけあっていた人びと、したがって数時間後、あるいは明日また共在者として自己の眼前に根源呈示されるであろう人びと(家族、友人、同僚などの身近な他者、公共交通機関で何度か居合わせ会話したことのある乗客や毎日顔をあわせる郵便配達員などの顔見知り)や自己といっさい面識のない人びと(テレビやラジオ等でしか知覚する機会のない芸能人や他国の大統領など)、c: 本源的に過去時制に属する「先行者」(自己に先行する時代を生きた行為者)である。

意識の共通の流れのなかで自己とともに生きる共在者だけでなく、そうした体験流の同時性を自己と直接には共有しない同時代者と先行者が主観的解釈の対象として想定されていることについては、「サイン」の送り手と受け手が「必ずしも相互に知り合っている必要はない」とみなされている事実や、「サイン」の形態に「かつての他者の行為の所産や結果」が含まれている事実からも読みとれる。同時代者の思考や感情は、その存在が全身的に自己に対して現前している共在者——自己と同じ「直接世界(Umwelt)」の構成員——と異なり、彼から直

接的に発せられる言葉（口語）、表情、身ぶりから解釈することはできず、文章、画像、映像といった非身体的な諸媒体によって間接呈示される。また、自己にとって広義の祖先である先行者の思考や感情は、過去の文献（古代エジプトのパピルス文書など）や記念物によって間接呈示される。

したがって「サイン」は、他者の身体および他者の世界の空間的・時間的な超越に対処する手段を構成している。すなわちそれは、自己からみて、到達可能な範囲外から到達可能な範囲内へと空間移動によって移行可能な「同時世界（Mitwelt）」における他者の思惟や、「彼ら関係」（非対面的関係）から「我々関係」への移行が原理的に困難な「先行世界（Vorwelt）」における他者の思惟を喚起せしめる記号（思惟の乗りもの）なのである。かかる側面は、他者に対する理解やコミュニケーションのコンテクストのもとで用いられる点において、「サイン」が間主観的な間接呈示的指示関係であることを示唆している。

以上のことからわかるように、「サイン」は後述する「シンボル」と同じく、行為者の意味付与や解釈の日常的営為と切り離すことができないものであり、その機能と形態をめぐる議論は、明らかに他者理解論の範疇に属しているし、同じ範疇においてさらに考究される余地を残しているのである。

2.3. 「シンボル」：一段高次の

間主観的な間接呈示的指示関係

シュッツは、「シンボル」を次のように定義している。「対関係のうちの間接呈示する側はわれわれの日常生活の現実内のひとつの対象、事実、ないし事象であるが、他方その対関係のもう一方である間接呈示される側は、われわれの日常生活の経験を超越している観念（idea）を指し示す、そうした間接呈示的指示関係である」（Schutz 1973b=1985：167）。

この定義からも窺い知れるように、シュッツの「シンボル」概念は彼の多元的現実論と相即不離の関係にある。同じ間主観的な間接呈示的指示関係でも「サイン」の場合、根源呈示されている形象（間接呈示する項）と「組化」される観念（間接呈示される項）が、直接世界であろうと同時に世界であろうと先行世界であろうと、あくまで日常生活の現実内で行為する他者の思惟であるのに対して、「シンボル」の場合、根源呈示されている形象（間接呈示する項）と「組化」される観念（間接呈示される項）が、日常生活の現実を超越した諸現実で行為する他者の思惟という点で決定的な違いがある。

シュッツは多様な現実を「限定的意味領域」⁵⁾と呼ぶが、そのなかでも日常生活の現実に関して、「至高の現実」（もともとW.ジェームズが感覚と物理的諸事物からなる世界をあらわすために用いた概念）として捉えることを提言する。すべての限定的意味領域の基層（基底）であるという実体において、至高の現実とみなすことに疑念を差し挟む余地のない日常生活の現実、基本的に「日常生活世界」と同義のものとみてよい。なんとなれば、シュッツが至高の現実の特徴としてあげる固有の意識の様式（生に対する十分な注意にもとづく覚醒状態）、および認知様式（他者を含む様々な事物に対するエポケー、すなわち疑問や疑念の停止）や社会性の様式（他者との共通のコミュニケーションと社会的行為）などは、すべて日常生活世界の存立条件をなしているからである。

シュッツにとって日常生活世界は、「人びとの間で行為する十分に目覚めた成人」（Schutz 1973a=1983：10）を主体とする世界、外的な行為環境および他者の存続についての自明な認識、いわばそれらの存在が、これからも安定してそこにあり続けることへの漠然とした確信である「存在論的安心（ontological security）」（Giddens 1991）にもとづく自然的態度によって支えられた世界、自己と他者が「社会共同体

における仲間 (fellowman)」として動機づけあい、そうすることを通じて共通のコミュニケーション環境を成立させている間主観的な世界を指している。

また、シュッツによれば、日常生活の現実から他の諸現実への移行、およびそれら「固有の認知様式と、明らかにされるべき固有の問題群及び地平群をもつ限定された意味領域」(Schutz 1970=1980:279)の間での移行は、日常生活の現実内で関わる他者や諸々の出来事に対する自然的態度が放棄される「特定のショック」を経験したときに生じるという。「夢の世界」への飛躍としての入眠、幕があがり「演劇の世界」へ移行する際に感じる内的な変化、S. A. キルケゴールが「瞬間」と呼んだ「宗教的領域」へ移行する際の様々な宗教的経験、「科学的思考の世界」への移行に際して、生活者としての情緒的な態度を停止し、科学者としての「私心のない観照の態度」に徹しようと決心することなど、日常生活をいとなむなかで経験する種々のショックのたびに、人びとは諸現実の境界を突破して、みずからの「現実性のアクセント」を別の限定的意味領域へと置きなおすのである。

日常生活世界の只中において、その他の有意義的な世界への飛躍が経験されるということは、「シンボル」の場合、間接呈示する項のみが至高の現実には属しているということを示唆している(「サイン」の場合、間接呈示する項と間接呈示される項いずれもが至高の現実の一要素をなしている)。それゆえ、絵画、ファンタジー小説、子供の玩具、共同的な礼拝、科学的理論として客体化されている「シンボル」は、「特定のショック」そのものの「物質的基盤ないし誘因」としての役割を果たしている。さらにそれらは、例えば科学者がひとたび価値関係的に研究対象を選択するや否や、「既成の科学的思考の世界に入り込み、その後は、他者によって得られた結果、他者によって述べられた問題、他者によって示唆された解決、他者によって作

り出された方法を含む、一つの言説世界に参加することになる」(Schutz 1970=1980:278)ように、多様な限定的意味領域内での相互行為を可能にする「物質的基盤ないし誘因」としても機能している。

畢竟するに「シンボル」が、「サイン」に比して「一段高次の」間主観的な間接呈示的指示関係に定位されるのは、荒唐無稽な「空想の世界」も含め、多様な限定的意味領域における何者かの観念という「あるところでかき消えてしまうような超越的な存在に対する特異な指示」(Schutz 1970=1980:262)の働きを本質的に担うためである。シュッツは「シンボル・現実・社会」論文を締めくくるにあたり、そうした「シンボル」のメタ的性格の根拠たる「至高の現実の領域を超越しているという事実」について、「真のシンボリズムとは、……探求できないものを生き生きと即時的に開示するものとして表わすところにある」(Schutz 1973b=1985:198)というゲーテの言葉を引用しながら、それが「シンボルの機能と形態」に関する社会科学的研究を促し導くものであると言明している。

3. 他者理解の「不正確さ」と間接呈示的指示関係

シュッツの一連の記号概念、なかんずく「サイン」と「シンボル」の間接呈示的意味として想定されているのは、現在時制および過去時制に属する他者の主観的意味(社会的行為の具体的なコンテキストのもとで思念されている関係上、厳密には主観的意味連関)である。シュッツは、コミュニケーションの意図や可能性がみられる場合の他者理解について、「記号の使用と解釈というまったく新しい次元を含むものである」(Schutz 1970=1980:163)と立言する。このとき重要となる論点は、記号を受けとる側の視点に立ったとき、共在者、同時代者、先行

者の思念する意味が純粋な主観的意味としてではなく、ひとつの「類型 (Typus)」として、いわば解釈者という外部の立場にもとづいて一般化 (標準化) され、抽象化された「客観的意味」ないし「客観的意味連関」として把握されているという側面である。

つまるところ他者の思念する意味は、その人物に固有の「生活史的状況」と直結した独自で個別的なものにほかならず、この厳然たる事実から、「主観的な意味を科学的に把握するということは、いかにして可能であろうか」(Schutz 1973a=1983: 88) というシュッツ流現象学的社会学の根幹をなす課題が示されるのであるが、科学者 (観察者) だけでなく日常生活者の視点からみても、解釈の実践の場で本人の脳裡に生起しているのは、他者や他者の行為に関する「類型化された事柄」にすぎない。

類型として理解される主観的意味には、行為に際して他者が抱く動機、観念、感情、そして他者が実際的に関与している現実や文化についての知識などが含まれるが、これら解釈対象としての他者の思惟は、いずれも何らかの記号による介在を通じて解釈者である自己に対して間接呈示される。この事実、その存在が全身的に現前している共在者との相互行為状況であっても変わることはない。かかる対面的なコミュニケーション環境において、他者理解のもっとも日常的な手段として用いられるのは身体化された「サイン」である。

シュッツによれば、他者を理解するためには、まずもって行為の目的動機と理由動機の双方を知る必要があるという (Schutz 1970, 1976)。多様な社会関係のなかでも、自己と他者が時間と空間を共有しながら間身体的に結びついている「我々関係」の場合、相手すなわち共在者の理解の中心を占めるのは、彼の行為を典型的なものとして説明可能にする「典型的な動機」にほかならない。むしろ「我々関係」のもとでは、他者も自己に対して同様の仕方で行為しており、

このとき自己と他者との間では「動機の相互主観的な結びつき」(動機の相互連関) が生じている。したがって他者もまた、自己の動機を身体と不可分な諸々の「サイン」を介して類型的に捉えているということになる。

意識と体験の流れの「生き生きとした」同時性のもとで展開される対面的な相互行為過程は、自己の行為 (働きかけ) の目的動機が相手の行為 (対応) の理由動機になり、逆に、相手の行為 (働きかけ) の目的動機が自己の行為 (反応) の理由動機になるという「鏡像過程」とも呼ぶべき様相を呈する。卑近な例をあげれば、私は「恋人同士になるために」好意を寄せる人物に告白するが、相手は「他に好意を寄せる人物がいて恋人同士になれないから」私の告白を断る。また、その人物にとって断りの返事は、私と今までどおりの友人関係を続けることを企図したものであり、私は相手の意向を汲み「今までどおりの友人関係を続けたいから」、あるいは「これ以上、迷惑をかけたくないから」という理由で潔く身を引く。重要なのは、相互行為の当事者同士が発する分節された音声、表情、身振りといった「サイン」が、二つの動機を含む相手の思惟を類型的に把握する手段として日常的に用いられているということである。

ところでシュッツは、「人間行動の類型」を二通りあげる。ひとつは「サイン」を用いて何らかの有意味的な表現＝間接呈示的行為を行っている (行なった) 他者という存在についての「人間類型」、もうひとつは、有意味的な表現過程＝間接呈示的行為それ自体についての「行為類型」である。ここで留意すべきは、人間行動に関する各種の理念型が、入れ子状ともいうべき「内的関係」をなしている点である。シュッツのあげる例に従えば、郵便局員や警察官の理念型は、当該人物の職務遂行上の動機を把握することなくして構成不可能であり、このことから、動機類型を理解したなら相手の行為類型が理解できるし、「行為類型を理解したなら、私

は人間類型を、つまり、『この職務を行う人間』を構成することができる」(Schutz 1970=1980:308)という類型的把握の構造的特徴が看取されるのである。

当然ながら他者理解の営為は、「シンボル」に媒介されたコミュニケーション環境もその舞台としている。「サイン」の場合と異なるのは、間接呈示される意味(類型として解釈される意味)が日常的生活経験を超越した行為の領域に存するという点だけである。さしあたり本稿では、芸術的、宗教的、空想的、科学的な他者の思惟も日常生活世界を成り立たせている常識的な思惟と同じく、間主観的な記号群に媒介されるかたちで類型的に把握されているということが確認できていれば十分であろう。

対象一般の意味理解の構造をめぐる認識論的問題と分かちがたく結びついたシュッツの記号論的研究に関して、類型化論や社会的世界論とも密接に関連している他者理解論の文脈によりひきつけて検討するとき、われわれが留意しなければならないのは、主観的解釈の対象をなしている他者の思惟が間接呈示的な仕方によってしか、つまり身体的ないし超身体的な記号の知覚を通じた「類型化」によってしか把握できないという事実である⁶⁾。これは、他者が実際に思念している主観の意味と、諸種の「サイン」および「シンボル」を介して自己が類型的に理解している客観の意味との間に大なり小なり乖離やズレが生じざるをえないということ、したがって、他者とのコミュニケーションには、相手の表現行為と私の解釈行為の内容(お互いがそれぞれの過程に付与した意味)が一致するとはかぎらないということ、他者理解の「不正確さ」あるいは「困難さ」がツネにつきまとうということである。

「日常生活の現実外での『外在的な超越』」⁷⁾に対応している「シンボル」を介した他者理解の経験に関していえば、多様な限定的意味領域(多元的な下位宇宙)のなかには複数の行為者

の間で共有しうる世界もたしかに存在しており、間主観的な参加と相互行為が可能である。そのため、そこで他者が抱く観念もまた、同じ有形的な記号を通じて自己と共有することができる。

かのW.ベンヤミンが幼少期に誰もが経験するガラクタ集めやおもちゃ遊びに看破したのも、物の使用価値が支配する日常的な生活空間を超越したメルヘンとファンタジーの世界へ子供達をアクセスさせるためのガジェットとして、建設現場の釘やネジ、道ばたの石や草花、錫の兵隊や船などが果たすシンボリックな機能であった。「子供たちは、……遊びながらそれらの屑から作るものを通じて、じつにさまざまな種類の素材相互のあいだに、飛躍に富んだ新しい関係をつくるのである。彼らはそうすることによって、自分たちの事物世界を、大きな事物世界のなかの小さな事物世界を、みずから手で形成する」(Benjamin 1928a=1997:34)、「この子が見つけた石、摘みとった花、捕えた蝶のどれもが、この子にはそれだけですでにひとつの蒐集の始まりであり、……夢の森のなかでの時間だ。……この子の引き出しは、武器収納所にして動物園、犯罪博物館にして地下祭室とならざるをえない」(Benjamin 1928a=1997:76-77)、「大人たちが子供に、白樺の樹皮あるいは麦わらでできた人形を、ガラスでできたゆりかごを、錫でできた船を与えようと思ったとき、大人たちは子供の感覚のまわりに彼らなりの仕方で戯れており、木材、骨、編み細工、粘土が、この小宇宙のなかでは最も重要な素材であり、それらはすでに家^{パトリアルヒ}長制の時代に全部使われていた」(Benjamin 1928b=2014:378-379)。

しかしながら、共有可能な「シンボル」の間接呈示の意味とて、類型的な観念の範疇で了解されるものにすぎず、相手の実際的な観念と完全に重なりあうものではない。むろんシンボル次元のコミュニケーションは、個人のみる夢や白昼夢、宗教家(予言者)の幻視など、もとより共有しがたい限定的意味領域内での行為が解

積対象であるほど困難なものとなる。

他者理解の「不正確さ」のパロメーターを純粹な主観的意味と類型化された主観的意味（客観的意味）との乖離やズレの程度と捉えるならば、自己にとってその多くが「内集団」の成員である共在者、同じく基本的には「内集団」の成員である同時代者（今この瞬間には私の眼前にはいない友人や知人達）、自己と同じ空間をかつて生きていた「内集団」の先行者（私の直系の先祖や彼らの友人や知人達）、「外集団」の成員である共在者（ほんのわずかの時間とはいえ、対面的コミュニケーションをとることになった外国人労働者や旅行客などの異郷者、あるいは趣味やイデオロギー、職種などの面で普段は別々の小集団に属している同郷者）、「外集団」の成員である同時代者（同郷、異郷を問わず自己と面識のない時間のみを共有している人びと）、自己とまったく異なる空間をかつて生きていた「外集団」の先行者という順で、右にいくにつれてコミュニケーション時の誤謬や齟齬の蓋然性は増していくものと考えられる。

ここであげた「不正確さ」のヒエラルキーは、そのじつ解釈対象としての他者存在の匿名性の程度をあらわすヒエラルキーであり、後者に向かうほど、非身体的・超身体的な記号体系が類型的把握に際して占める比重は大きくなっていく。その理由として、「外集団」の同時代者や先行者との行為のあり方が、非対面的な「彼ら関係」に固定されており、自己との空間的・時間的な無媒介の接触が困難あるいは不可能なものであることがあげられる。さらにいえば、同ヒエラルキーは、シュッツによる記号概念の射程範囲の限界（その主観的意味を諸々の記号によって解釈しうる他者存在の範囲はどこまでか）をも示している。

他者一般の思惟が間接呈示的な仕方によってしか把握できないという事態、つまり他者理解が、様々なレベルの超越の経験に対応している「サイン」や「シンボル」に依るほかないにも

かわからず、誤謬や齟齬のリスクを避けられないという事態は、換言すれば、ほかならぬ所与の間接呈示的指示関係が、他者理解の「不正確さ」や「困難さ」といった制約を結果的にわれわれに課しているということでもある。

肝要なのは、われわれが何故、そうした不可避的な制約下に置かれながらも、基本的には破綻なく他者とのコミュニケーションがとれているのか、かかる疑問の鍵を握るといっても過言ではない他者理解の機序——記号を介した思惟の類型的把握——を支えている知識（行為や文化、あるいは世界を解釈する際の準拠図式）の存在である。自己および少なくとも自己にとって汝志向の対象となる相手は、当人の体験や「重要な他者（significant other）」との関わりをとおして「（手持ちの）利用可能な知識」を蓄積してきている。この知識には、日常的に話されている国語や母語の語彙や構文に関する知識はもちろんのこと、他者についての一般のおよび特殊な知識⁸⁾、通常は自明とされている目的動機と理由動機に関する知識、さらに間接呈示的指示関係を読み解くうえで参照されるコード、つまり「他者の解釈図式・習慣・言葉遣いについての知識」（Schutz 1970=1980:184）などが包摂される。

したがって「内集団」の成員同士の場合、「サイン」の読解コードを含む常識的な知識や「シンボル」の読解コードを含む特殊な知識——特定の限定的意味領域内で通用する——の共通性の程度が高いことは容易に想像できる。そのため、たとえ自己の「今」と「ここ」を超越した現実内にいる他者であっても、同属成員であった経験が一時期でもあれば、いっさいそのような経験がない他者に比して、コミュニケーション時の誤謬や齟齬が生じる蓋然性は抑えられる。翻って「サイン」や「シンボル」の読解コードの共通性が低いために、コミュニケーション時の誤謬や齟齬の蓋然性がおのずと増してしまうのが、「外集団」の成員——いずれも、なか

ば恣意的に自己と自己の仲間から特定の「人間類型（人的理念型）」として表象されている意識のない同時代者や、われわれと生きた時代も空間も異なる先行者——であり、とりわけシュッツの言辞によるところの「よそ者（The Stranger）」なのである。

4. 「よそ者」の他者理解経験と 間接呈示的指示関係

ウェーバーの唱えた理解社会学が、他者理解論の嚆矢として社会科学に多大な足跡を残したことは疑いようのない事実である。ただ、ウェーバーの場合、社会的行為における過程や結果の因果的説明のために、そのいとなみに付与された意味を理解しなければならない他者として暗黙裡に想定していたのは、「利用可能な知識」の共有主体、すなわち言語ひいては文化を同じくする「内集団」の成員であった。社会的、文化的なレベルでの他者理解の「不正確さ（困難さ）」という問題にアプローチする際、「外集団」の成員が「内集団」の成員との相互行為状況下で直面せざるをえない限界とはいかなるものなのか、またそのような経験を間主観的な「諸々の間接呈示的指示関係の諸群」がいかに規定しているのかに関しては、シュッツの「よそ者」論との関連づけを通じて考究の余地が生じよう。

シュッツは「よそ者」について、「接近する集団に永続的に受容されようとするか、あるいはまた少なくともその集団に容認されようと試みる者」（Schutz 1976=1991:133）と定義し、なかでも「格好の例」として移民（ディアスポラ）をあげる⁹⁾。シュッツが着目するのは、「よそ者」が異郷集団（ホスト社会の集団）に接近していく過程で不可避免的に経験する特有の「危機」である。それは異郷集団の「文化の型」——フォークウェイズ、礼儀作法、流行、慣習、実定法など、「固有の価値判断、制度、方向づけや指針の体系の全体」（Schutz 1976=1991:134）——

についての「おそらく、このようなものであらう」と想定していた観念が、まったくの誤解や偏見にすぎなかったことに否応なく気づかされる事態である。さらに異質なコミュニケーション環境への参入時にともなう「危機」は、「よそ者」からすれば、異郷集団の文化の型について蓄積してきた類型的な知識のみならず、故郷集団内で当たり前に通用していた解釈図式も含めて、「自分の習慣となっていた『いままで通りの考え』の妥当性への信頼を揺るがす最初の衝撃」（Schutz 1976=1991:142）として降りかかってくるものなのである。

故郷集団にいた頃に培われた既成の観念が、新しい生活世界のもとでは何ら有用な解釈図式として機能しないという状況は、異郷集団の文化の型に関する知識を「よそ者」が与件的に欠いていることに根差している¹⁰⁾。「よそ者」に特有の「危機」の本質は、文化の型に関する知識を自由に利用できるのが、「内集団」の成員に限られているという事実に見出される。文化をめぐる諸種の知的類型は、同属成員が「社会的世界を解釈するための」図式、および「最小限の努力で最良の成果を得るように事物や人間を取り扱うための、信頼に値する処理法（recipes）に関する知識」（Schutz 1976=1991:138 傍点：原著者）であり、安定的かつ持続的な「行為の方向づけの図式」——「社会的世界の内でふつうに生起するあらゆる状況における疑問視も疑う余地もない案内」（Schutz 1976=1991:137-8）——として機能しているのである。

それゆえ、「よそ者」は異郷集団に受容されるべく、そこに所属する成員にとっては所与のものである知識を社会化しようと努めるわけだが、その際、異郷集団の文化の型に関する用語、すなわち芸術的、宗教的、科学的な知識の貯蔵庫といえる言語的シンボルを自分達の故郷集団の用語に翻訳する方法が選択される。「よそ者」は、そうした翻訳の手続きをとおして「新しい

文化の型の構成諸要素についての明示的な知識」(Schutz 1976=1991:147)を収集し、それらを再現によって表現図式として利用しようとする。また、「異質な」言語的シンボルの翻訳は、「異質な」言語的サイン、すなわち(異郷集団の)日常生活世界内での常識的な思惟を伝達する国語や母語の修得を必然的にともなうが、すでにこの段階で、間接呈示の指示関係がコミュニケーションの「不正確さ」を逆説的に規定しているという問題が露呈される。

というのも、言語的サインには部外者の理解と翻訳を拒絶するような、通常の仕方では教えることのできない含意(内包的意味)を豊富にそなえつつ「緑^{フリンジ}暈」の領野が存在しており、その多くは、「それが使われるコンテクストとか社会的環境から派生する話し言葉に特有の第二次的な意味」(Schutz 1976=1991:144)に溢れているのである。ここでの「第二次的意味」は、個人の人生経験に由来する情緒的意味や集団の社会的・歴史的背景にもとづく「共同主観的付随概念」など、文化記号学でいうところの「共示義(connotation)」——語の一般的で辞書的な「第一次的意味」=「表示義(denotation)」に随伴する潜在的で暗示的な意味——が中心的な位置を占めている(丸山1994)。「よそ者」が、異郷集団の「緑暈」を共示義レベルの表現図式として自由に使いこすためには、それを用いてラブレターの一枚でも書けるようにならなくてはならないし、コンテクストに応じた微妙な語調をとまなうパロールを遂行できるようにならなければならないが、むしろ困難な要求である。

「よそ者」にとって、言語的サインのレベルですら自分達の解釈内容と異郷集団の成員達の解釈内容が一致していると想定できないということは、言語的シンボルを介したコミュニケーションともなれば、双方の解釈内容(日常生活世界を超越した限定的意味領域に関する思惟)の一致が、よりいっそう難しいものになることは容易に推察されるであろう。実際に芸術、宗

教、科学、さらにはSFフィクションや遊戯の世界で用いられる言葉が、どれだけ特定の社会集団に限定された言表の仕方をとまなうか、またそれらが、どれだけ共示義の支配する専門用語や隠語で満ちているか思い起こしてみるとよい。

シンボル性の記号体系全般にいえることだが、そもそも解釈図式は同属成員すべての間で共有されているわけではない。「どんな社会集団も、たとえそれがどんなに小規模であっても、……私的なコードをもっている。そして、そのコードが理解できる人びとは、そのコードが成立することになった過去の共通の経験に関わってきたか、あるいはそうした過去の共通の経験と結合している伝統に関わってきた人びとのみである」(Schutz 1976=1991:144)という傾向は、「サイン」よりもむしろ「シンボル」に妥当し、多様な限定的意味領域が相互に自立的な存在として確立されるのは——諸領域の境界をまたいだコミュニケーション環境への間主観的参加が限定的なものに留まりがちになるのは——、程度の差はあれ解釈図式としてのコードが私秘的な性質をもつためである。したがって、文化の型に関する知識の伝達と継承の「第一次的な」手段である言語的シンボルの場合も、「内集団」のしかも特定の小集団の成員だけが接近可能なのである。

さらにシュッツは、「よそ者」が異郷集団の文化的知識を容易には修得できない理由について、「異質な」言語的シンボルを自在にあやつるための私的コードから隔離されていること以外に、たまたま観察したある個人の行動様式を、接近している集団全般に特有の行動様式として誤認してしまう傾向をあげる。このとき、単なる個人的特徴と混同される集団の「類型的特徴」を示す行為は、成員ひとりひとりの身体を基礎にしているとはいえ、文化の型に関する一種の共有知識に依拠したものであるという点において、やはり「サイン」よりも「シンボル」の一

部とみなすべきであろう。いずれにせよ、これら二つの要因が相まって、「内集団」のなかで間接呈示的に伝達され継承される、「ただ従うだけでよく、理解する必要はない疑問視されない処理法の有効性に頼っている人びとからみれば、きわめて単純明快に思われるあらゆる事柄に対して、よそ者は不信の気持ちをもつのである」(Schutz 1976=1991: 147-8)。

シュッツが「よそ者」論の文脈で中心的にあつかう移民は、ホスト社会成員の視点に立った場合、少なくとも最初の段階では「外集団」の同時代者である。彼らが異郷集団に接近する過程で適応ないし克服を強いられる「危機」に目を向けたとき、われわれが日常的に用いている諸々の記号が、相互理解を前進させるうえで不可避な存在にもかかわらず、その過程を複雑化させ、困難化させているというパラドキシカルな事態が浮かび上がるのである。

結びにかえて

否定しがたい傾向として、シュッツが後期に示した一連の記号概念、とりわけ日常生活世界内に現実性をもつ思惟の運び手である「サイン」、および日常生活世界外に現実性をもつ思惟の運び手である「シンボル」に関して、具体的にいかなる様態がどこまでそれぞれの範疇に含まれるのか、形態学的ないし分類学的な曖昧さはつきまとう。しかしながら、「対象一般の意味理解の構造」に照準した間接呈示的指示関係をめぐる彼の議論を、社会的世界の諸次元(直接世界、同時世界、先行世界)に属する人びと(「サイン」と「シンボル」両概念が射程に収める共在者、同時代者、先行者)の「あらゆる思考の間主観的な構造」に再照準して、つまり、理解社会学の哲学的基礎づけを志向した初期から一貫してシュッツの中核的な関心事項であり続けた他者理解の機序に的をしぼって捉え返す試みは、例えばエスニシティなど、文化が異なる

主体同士の相互理解の可能性や限界といった問題について、多文化主義に代表される制度的な視点から、あるいは所謂「普通の人びと」の生活者の視点から追究するうえで、有益な理論的基礎をわれわれに提供するものと評価できる。

さらに今後、自然的態度の構成的現象学に立脚したシュッツの記号論的研究を異文化理解や異文化コミュニケーションの問題解決に寄与する、「理論的基礎」以上の水準に高めようと思えば、「社会的な間主観性」の科学的概念構成をめぐるアプローチにおいて、客観主義的な「分析的リアリズム (analytical realism)」との間に横たわる懸隔を無視できないものの、われわれはその方途を、人種的・民族的マイノリティの包摂問題に着目したT.パーソンズのアメリカ社会論との統合に求めることができるかもしれない。あるいは、J.C.アレクサンダーのエスニック外集団に関する包摂理論のほうが実り多い統合の源泉たりうるかもしれない。

紙幅の制限によりシュッツ社会学の止揚可能性についての詳しい考察は別の機会に譲るほかないが、例えば、新機能主義(パーソンズ社会学の批判的継承を標榜してアメリカで興った理論運動)の旗手として知られるアレクサンダーは、どちらかといえばマイノリティの単線的な包摂過程を想定していたパーソンズに比して、より複雑な包摂過程をカバーしうるモデルの構築に関心を注いでいる(Alexander 1980)。アレクサンダーにとっての包摂とは、分裂傾向にある多様な民族集団が、それぞれの文化的・歴史的紐帯(集合的なアイデンティティと記憶の拠り所となる言語、信仰、人種、領土的起源など)を維持しながらも、「コア集団」(ホスト社会成員)との知的類型の溝が埋まるような相互作用をとおして、人種的・民族的コミュニティの枠を超えたターミナル・コミュニティの成員という一体感を獲得し、深めていく現象学的経験なのである。

注

- 1) シュッツは、未来時制に属する他者の世界を「後続世界 (Folgewelt)」と呼ぶが、現在時制に属する自己は、当然ながら後続者の体験に起源をもつ解釈図式を何一つ所有しておらず、彼らの思惟を「どのような方法によっても、また類型化によってすら、把握することはできない」(Schutz 1976=1991:94)。そのため、シュッツの記号概念を純粹に他者理解論の水準で捉え返すことを企図した本稿では、後続世界および後続者についての詳細な議論を割愛する。
 - 2) シュッツによれば、各行為者が見ることや聴くことのできる「知覚されうる諸対象から成る世界のこの領域」(Schutz 1973b=1985:137)が^レ實際的に到達可能な範囲内の世界であり、さらにそのなかに、各行為者が知覚するだけでなく物理的に操作することのできる諸事物の領域があるという。
 - 3) パースは「インデックス」について、「力動の対象と実在的に関係しているおかげでそれによって規定されている記号」(Peirce 1931-1935, 1958=1986:154)と定義するが、気圧計や風見鶏、病気の症状などとともに、火や雷鳴をその範疇に含めている。ランガーは記号のうち、「事物 (object)」の客観的狀態を「主観 (interpreter)」に指し示す「シグナル」について、列車の汽笛や就業ベルなどの人為的なものと、日の出の微候である暁や豪雨 (雷雨) の微候である雷鳴などの自然的なものに区別する (Langer 1957)。シュッツは「指標」の特徴として、「個人が自己の實際的に到達可能な範囲内にある諸要素と、その範囲外にある諸要素とを関係づけること」(Schutz 1973b=1985:143)をあげているが、パースとランガーも、指示対象との因果的、経験的な連結性にインデックスおよびシグナルの特徴を見出している。
 - 4) シュッツは、相互的な汝志向を「自己と他者が相手の存在を志向的に意識している態度」と捉えている。「汝志向は、一方向的である場合も相互的である場合もあるのである。……われわれが互いに相手に気づいている場合、つまり、われわれがどちらも相手に対する汝志向を行っている場合には、それは相互的である」(Schutz 1970=1980:178)。したがって、自己と他者がお互いに相手にとってノエマの対象をなしてい
- る相互的な汝志向にもとづく「我々関係」は、「他我の一般定立」(意識の流れにおける他者との「生き生きとした」同時性の経験)を必然的にともなう。つまり共通の対面的なコミュニケーション環境において、自己と他者は一緒に年を経ているということ、「現在」という思考や感情の流れの継起的な時間構造を共有しているということである。
- 5) シュッツは、多様な現実世界が構成される根拠を事物の単純な存在論的構造ではなく、あくまで行為者による経験の「意味」に見出しており、かかる認識のうえで「限定的意味領域」という表現を用いる (Schutz 1970)。
 - 6) 間接呈示的指示関係をめぐるシュッツの考察に関して、他者理解の機序に焦点をしばって検討する試みは、『社会的世界の意味構成』の終盤で彼が掲げた三つの探求課題のうち、他者一般に関わる「人格の理念型」等の社会関係に関する問題と「あらゆる思考の間主観的な構造の解明」に関する問題の接合という側面をもつものといえよう。
 - 7) 同時代者や先行者の暮らす世界は、たしかに自己の「今」と「ここ」を超越している。ただし、主に「サイン」をとおして間接呈示される彼らの思惟は、あくまで日常生活の現実をその生起と展開の舞台にしており、このレベルにおける超越の経験について、シュッツは『日常生活の現実内での『内在的な超越』』(Schutz 1973b=1985:193)と表現している。
 - 8) 例えば、自己に対して全身的に現前していない (自己の潜在的に到達可能な範囲内にいる) 同時代者に関する知識には、少なくとも、①相手が私と同じ時の流れを生きている (時間的に共一存在している) 人物であるという知識、②相手がかつての共在者だった場合、その人物と対面的に接していた頃に蓄積された知識、③相手が最初から「人間類型」として表象されている直接的には面識のない郵便局員や警察官などの場合、「手紙を投函すれば宛名を正しく書いてくれたり切手を貼ってくれるだろう」、「違反すれば法執行者として厳しく対応してくるだろう」といった予想にもとづいて類型化された職務遂行に関する知識が含まれる。とくに②についてシュッツは、これを参照する行為を、「他者の何らかの類型的な属性を変化しないものと想定し、同時に、その属性が『現実の生のなかで』、すなわち具体的で独自の個人の進行中の

諸体験のなかで具体化された場合に被る様々な変様や変化を考慮の外におくという、ひとつの思惟作用」(Schutz 1976=1991:73)とみなしている。

- 9) シュッツは「よそ者」の対象から、「子供や未開人」、「異なった文明段階に属している個人や集団間の関係」とともに、「集団と単に一時的な接触をもとうとする訪問者とか客人」(Schutz 1976=1991:133)を意図的に除外している。このことから窺い知れるように、シュッツにとって「よそ者」に範疇化される移民の条件は、越境の理由が出稼ぎであろうと亡命であろうと、異なる国や地域への定住の意志をもっているという点に尽きる。
- 10) 裏返せば、「よそ者」が所有している既成の観念は、「異郷集団の成員の応答ないし対応行為を喚起するのがねらいで形成されたものではない」(Schutz 1976=1991:141)以上、異郷集団の成員によって検証することも反証することも不可能な、彼らから隔離された恣意的な類型でしかないということである。

文 献

- Alexander, J.C., 1980, "Core Solidarity, Ethnic Group, and Social Differentiation: A Multidimensional Model of Inclusion in Modern Societies," Jacques Dofny and Akinsola Akiwowo, eds., *National and Ethnic Movements*, Beverly Hills: Sage. (=1996, 鈴木健之訳「コア連帯, エスニック外集団, 社会分化」鈴木健之編訳『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣, 99-128.)
- Benjamin, W., 1928a, *Einbahnstraße*, Berlin: Ernst Rowohlt Verlag. (=1997, 久保哲司訳「一方通行路」浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション3——記憶への旅』筑摩書房, 17-40.)
- , 1928b, "Kulturgeschichte des Spielzeugs," Hella Tiedemann-Bartels, Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser eds., *Gesammelte Schriften, Band III: Kritiken und Rezensionen*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1991. (=2014, 久保哲司訳「おもちゃの文化史」浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション7——〈私〉記から超〈私〉記へ』筑摩書房, 374-380.)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford: Stanford University Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Langer, S.K., 1957, *Philosophy in a New Key, a Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1960, 矢野萬里・池上保太・貴志謙二・近藤洋逸訳『シンボルの哲学』岩波書店.)
- 丸山圭三郎, 1994, 『言葉とは何か』夏目書房.
- 西原和久, 1998, 『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂.
- Peirce, C.S., 1931-1935, *The collected papers of Charles Sanders Peirce, Vols. I-VI* eds. Charles Hartshorne and Paul Weiss, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1986, 内田種臣編訳『パース著作集2——記号学』勁草書房.)
- , 1958, *The collected papers of Charles Sanders Peirce, Vols. VII and VIII*, ed. Arthur W. Burks, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1986, 内田種臣編訳『パース著作集2——記号学』勁草書房.)
- Schutz, A., 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Vienna: Springer Verlag. (=1996, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.)
- , 1970, *on Phenomenology and Social Relations*, Chicago: University of Chicago Press. (=1980, 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊國屋書店.)
- , 1971, *Phänomenologie und die Sozialwissenschaften, Gesammelte Aufsätze-I*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 136-161.
- , 1973a, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff. (=1983, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻——社会的現実の問題〔I〕』マルジュ社.)
- , 1973b, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff. (=1985, 渡部光・那須壽・

西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集
第2巻——社会的現実の問題〔Ⅱ〕』マルジュ
社.)

——, 1976, *Collected Papers II: Studies in
Social Theory*, The Hague, Netherlands:
Martinus Nijhoff. (=1991, 渡部光・那須 壽・
西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集
第3巻——社会理論の研究』マルジュ社.)

Weber, M., 1922, *Soziologische Grundbegriffe,
Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J.C.B.
Mohr. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本
概念』岩波書店.)

(しらいし てつろう
社会学部非常勤講師)